

2020 TOEIC® セミナー 報告書

九州から世界へ

～これまでも、これからも、英語は大切やけん～

2021年2月16日(火) ANAクラウンプラザホテル福岡

九州から世界へ

～これまでも、これからも、英語は大切やけん～

2021年2月16日(火) ANAクラウンプラザホテル福岡

基調講演 1

英語の大切さ、楽しさ

麻生セメント株式会社 代表取締役会長/学校法人福岡雙葉学園 理事長 麻生 泰 氏

事例発表 ① LINE Fukuoka株式会社 8

LINE Fukuokaの“WOW=No.1”をめざす語学支援とは

LINE Fukuoka株式会社 開発センター 開発2室 室長 新田 洋平 氏

事例発表 ② 株式会社ホンダロック 14

製造業において求められる英語力と仕事現場での英語使用の実際

株式会社ホンダロック 人事・総務部 人事・労務課 池田 典子 氏、坂本 悠 氏

事例発表 ③ 株式会社ふくおかフィナンシャルグループ 19

English Education Strategy of FFG

株式会社ふくおかフィナンシャルグループ 人事統括部 人財開発センター長 酒口 昇 氏

主催：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

後援：福岡商工会議所

英語の大切さ、楽しさ

麻生セメント株式会社 代表取締役会長 / 学校法人福岡雙葉学園 理事長

麻生 泰 氏



■ 英語とともにあった我が人生

皆様こんにちは。ご紹介いただきました、麻生でございます。今回このような TOEIC® セミナー、いわゆる教育関係の場でお話しするというのは、私の学生時代の成績を知っている方からすれば「いつの間にそんな偉そうなことをやるようになったんだ」と言われそうなほど、学生時代はあまり勉強しなかった私ですが、ただ、英語だけは非常に重要だと考えてきました。その大切さや楽しさを、本日は教育関係者の方々、または企業で社員向けの教育をされている方が多いと伺っていますので、ぜひお伝えしたいと思います。よろしく願いいたします。

これほど英語によるコミュニケーション力がないと言われる日本は、このままでは“ギリ貧”です。もちろん、過去よりはよいです。私の父よりは私のほうが英語は上手ですし、息子のほうが私より自信を持って取り組んでいます。国内だけをみれば英語力は多少改善してはいますが、韓国や台湾とのギャップはどんどん開いています。韓国や台湾のビジネスマンの子どもたちは米国の教育を受けている方も多く、全く生活に困らないほど話せます。その中で、日本のこのコミュニケーション力のなさは問題です。特に TOEIC® Program が大切にしているインターナショナルコミュニケーションという、発信する力、聞く力をぜひ身につけていてもらいたいと思います。

私の父は筑豊で炭鉱の採掘・製造業を営んでおり、

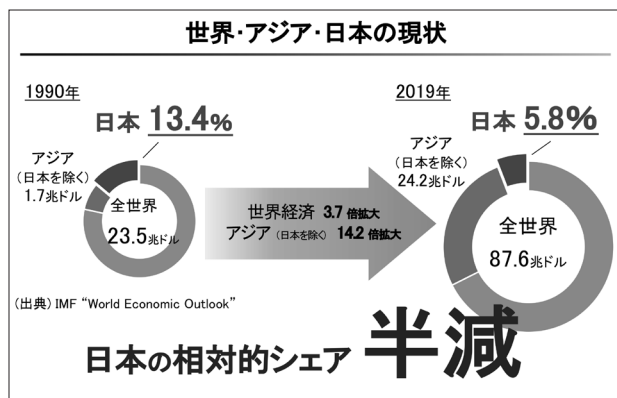
母は外交官の娘でした。兄弟姉妹6人、勉強についてはあまり言われなかったのですが、英語に関しては別で、6人全員が小学3年生から6年生までの4年間、曜日に分かれて週1回2時間の英語教室に通っていました。約15人のクラスでしたが、とても楽しく教えてもらいました。ある日のテストで私がカンニングをしてしまった際、先生に「麻生さん、Don't look! Don't look!」と言われました。「静かにしていなさい」ということかなと思い、黙って答えを見ていたら、実は「カンニングをするな」という意味だったのです。そんなことも分からないまま通っていたのですが、小学生のころからよい音を聞くということはとても大事だと思っています。

当社では、毎年多くの社員が TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC L&R)の団体特別受験制度(IP:Institutional Program、以下IPテスト)を受けています。ここ2年間は休んでいましたが、私もほぼ毎年一緒に受けています。しかし私は、文法を最初からきちんと勉強してこなかったこともあり、800点という厚い壁をなかなか越えることができませんでした。毎年同じようなスコアなのですが、受験者の英語力を正確に測るという点において TOEIC L&Rは実によくできていると感じます。

■ 世界における日本の相対的地位の低下

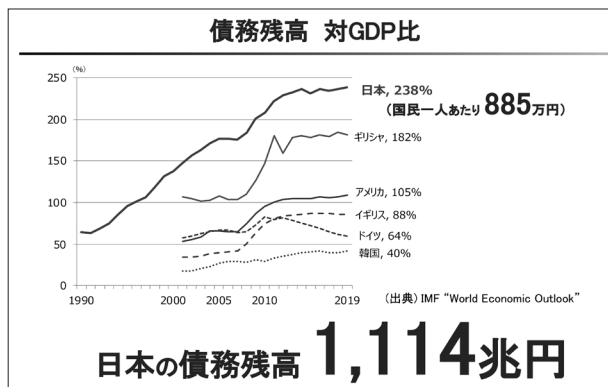
まず、資料1をご覧ください。これが日本の現状です。ほんの30年前である1990年の日本は世界全体のGDPの13.4%を占めていました。ところが、2019年には5.8%まで減少しています。日本が全く伸びず、約5.1兆ドルのまま横ばいしている間、アジアは約24兆ドルにまで伸びました。IMFによれば、2040年頃には日本の世界的シェアは3%台になるそうです。世界における日本のポジションは、かつてのオランダやポルトガル、スペインと同じになるようとしています。“Good old days”ですね。ビジネスサイドから日本の先行きを見ると「このままではまずい」という現状があるわけです。

(資料1)



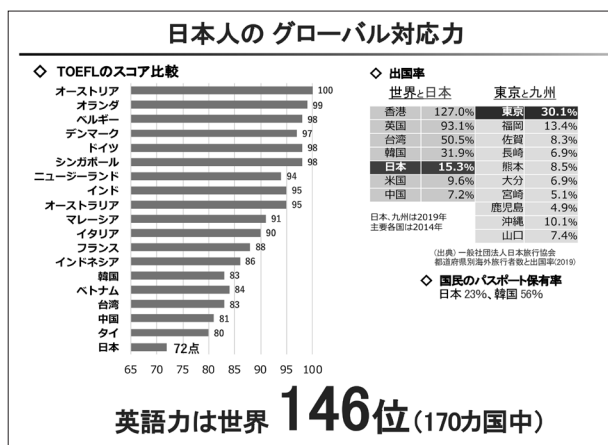
日本の債務残高は収入の2倍以上です(資料2)。乳児も入れて1人当たり約885万円の借金を背負っているということです。さらに今回、新型コロナウイルス感染症の影響で175兆円超の特別予算を計上していますから、さらに債務は拡大するでしょう。しかし、GDPは伸びていません。

(資料2)



資料3をご覧ください。こちらはTOEFLですが、日本の英語力は世界146位だそうです。韓国などよりも一段と低いことがわかります。加えて、4人ないし5人に1人しかパスポートを持っておらず、6、7人に1人しか日本を出ていない。九州を県別に見ると、福岡県以外の出国率は非常に低いというのが現状です。

(資料3)



■ “危機感なきジリ貧”の日本

私はこうした日本の現状について、よく“危機感なきジリ貧”と言っています(資料4)。国力が徐々に下がっているにもかかわらず、この国には危機感がまるでなく、皆ゆっくりしています。そして、“煮詰まる日本”と“伸びゆくアジア”です。同じようにGDPが伸びていないフランス

やイギリスからは「日本はいいよな。同じく煮詰まっても、周りが伸びゆくアジアだもんな」と言われます。ヨーロッパのポルトガル、イタリア、ギリシャ、スペインの南欧4カ国も全く伸びていません。それに比べて「アジアは10%くらい伸びていて、これからアジアの時代が来る。そのとき日本にはアドバンテージがあるよね」ということです。確かに、我々の先輩たちがアジアに対して日本や日本のブランドのよいイメージを作ってきてくれたので、そういった恵みはフランスやイギリスよりあります。

(資料4)

日本の現状
<ul style="list-style-type: none"> • 危機感なきジリ貧 • 煮詰まる日本、伸びゆくアジア • 一億総評論家 • ノーミステイクで発表をするが、意見交換では発信力のない日本人

さらに問題なのは、“一億総評論家”です。「ああ、あの大臣もだめだな」「いや、この人もだめだよ」と誰もが気楽に発言していますが「では、あなたはどの役立っているのですか」と思ってしまいます。もしかしたら、中国へ出稼ぎに行かなくてはいけない、スペインやポルトガルの後追いになるかもしれない、そういった可能性を考えると私自身はともかく、子どもや孫にとって日本の現状は問題です。そうならないためにも、皆様方にぜひ英語によるコミュニケーション力育成の先導役を担っていただきたいのです。

日本人は、海外でのあいさつや演説、提言を“No mistake”ですと言われる。事前に念を入れて原稿をチェックしているので、全くミスなくお話しされるのですが、その後外国人に“What do you think?” “What’s your point?”と尋ねられても、答えることができません。「国際会議の議長の仕事の一つは、インド人を少ししゃべらせないようにして、日本人の口を開けさせること」という言葉があるほど、意見交換の場における日本人は

“Silent” “Smiling” “Sleeping” だということです。

■ 小学生から英語で学ぶ 福岡雙葉学園の英語教育

カトリック信者の私は、12年ほど前から福岡雙葉学園の理事長を仰せつかっています。本業はセメント業ですから、当初はとてもそんなことはできないと思いましたが「何かカトリックのためにやろう」と考え、お引き受けすることにしました。その際私がシスターにお願いしたのは、カトリック教育とともに、英語教育に力を入れるということです。当学園には、もともと学園の使命があります。私の理事長時代の使命は「神の恵みに感謝し、地球社会の一員であることを自覚して、行動する人」づくりです。自分は“One of them”なのだと思覚した上で、どう役立っていくのか、自分に与えられた恵みに感謝してどう貢献していくのかを考え、行動する人材を育成するということです。

特に、力を入れている英語教育においては全員が小学1年生から英語を学ぶだけでなく、3クラスのうちの1つであるグローバルコミュニケーションコースでは算数や生活科も小学1年生から英語で学びます。ですから、非常に発音も上手で、数々の大会で優秀な成績を収めています(資料5)。先日も、帰り際にネイティブの先生にあいさつをしようと並んでいた小学3年生くらいの子もたちが、互いに英語で話している光景を目にして「ここまで話せるようになるのか」と驚きました。

(資料5)

福岡雙葉学園 実績【2019年度】
【世界大会】 ・The World Scholar’s Cup 2019 Kyushu Round <全日本> 1位・2位 ・The World Scholar’s Cup 2019 Sydney Round <世界大会> 銀賞
【国内大会】 ・Fun First 中学生英語選手権 総合優勝、Best Communicator、佐世保市長賞

■ アクティブラーニングとリモート授業

当学園には今、外国人教員が15人在籍しています(資料6)。彼らの授業はいわゆるアクティブラーニングで、子どもたちに必ず意見を求めます。“Why?”“How?”“What do you think?”など、どんどん質問を投げかけるので、子どもたちも自然と自分の意見を述べるようになります。私はこれが非常に日本の弱い点だと思うのですが、当学園の子どもたちはこのような環境で育っていますから、中学校に進学しても非常に積極的に質問や意見を述べます。私にとっては「英語を教えるなら、福岡雙葉で教えたい」「あの子たちを磨きたい」と、質の高い外国人教員が自然と集まってくる学園のクオリティをどう維持するかが重要だと考えています。

(資料6)



今はさらに、リモートによる教育も始まっています。これも先生方にとっては非常にチャンスです。学校での授業ではほとんど話さない大人しい子どもが、自宅からリモートで参加すると、自分から手を上げたり、話したりするなど、リモートならではの流れも起きています。

私が先生方をお願いしたいのは、先生方も明るく、学ぶ姿勢を子どもたちに見せていただきたいということです。ある先生が私に「自己成長していない教員はだめだ。いつも同じようなこと言っている教員は、『教』はできても『育』はできない」と教えてくれました。「子どもたちはきちんと見ているから先生に魅力を感じる。そういった先生の成長というものがとても大事だ」ということです。

■ 英語の大切さ、楽しさとは

日本の現在の人口は約1億2,000万人です。地球全体では70数億人で、いずれ80億人、100億人になると言われています。日本語が分かる地球人は2%未満。98%以上の人と話ができないとなると、会社は社員を雇うことができません。既に、韓国の双龍(サンヨン)や東洋(トンヤン)といった会社は、約10年も前からTOEIC L&Rスコアが650~700点なければ採用試験に応募することすらできません。同じセメント会社でも当社とは英語のレベルが全く違うなと感じました。英語を話す人の割合は、今後ますます増えていきます。特にアジアは今、積極的に英語を学んでいますから、きっと全世界で3割近くにまで英語を話せる人の割合は高まっていくでしょう。

私はオックスフォード大学に3年間在籍していたことがあります。当時もやはり英語には苦勞しました。しかし、私はスポーツが得意だったので、スポーツや音楽、アートといった共通のテーマで会話を楽しむことができました。また、私が経営する飯塚病院では、ハーバード大学の関連病院である「Brigham and Women's Hospital (BWH)」と交流活動を行っていますが、大きな大学病院ではなく当院が交流先として選ばれたのは、私が英語で熱心に思いを訴えたからだと思います。

このように私は、英語のおかげで楽しさはもちろん、多くのものを得てきました。海外に行った際も、少し言葉が分かると、それだけでおもしろくなります。先ほどお話ししたように、諸外国もかなり英語のレベルを上げてきていますから、ぜひ英語力をつけて大いに楽しんでいただきたいと思います。

■ 自分の意見を述べる＝ 真のコミュニケーション力

「翻訳機の性能が向上してきていますが、今後も英語を学ぶ必要性はあるのでしょうか」と、ある英語教員に尋ねられたことがあります。冗談じゃないですよ。機械を置いて初対面の人と話をしても、“Communication”はできません。“What do you think?” “I think so …”などと努力しながら話をするので、相手は「英語は上手ではないけれど、一生懸命伝えようとしてくれているな」と察し、より分かりやすく、ゆっくり話してくれるようになります。そうすると私たちも「この人は嫌な人じゃないな」といった、翻訳機にはできない判断ができるようになるわけです。ですから、直接相手にぶつかっていく生のコミュニケーション力をぜひ、磨いていっていただきたいと思います。

日本では「沈黙は金」「出る杭は打たれる」というように、少しでも目立つと抑え込まれるという風潮がありますが、“The squeaky wheel gets the grease”（きしむ車輪は油をさしてもらえろ）というように、海外では全く逆の常識があるというのも興味深い点です。私は40代初めのころ、フランスの会社のアドバイザーボードメンバーに選ばれました。アジア人はインド人と香港人と私の3人で、残りは欧米人だったのですが、その会議の迫力がとても印象に残っています。“Why don't you do that?” “What's a stupid idea!”と、皆ものすごい勢いで意見を述べ議論を引っ張っていました。互いに意見をはっきりと言い合い、それでいて全くしこりが残らない。終わった後に「ちょっと、さっきは言いすぎたな」「いや、よかったよ。確かにあの指摘は合っているよ」というやり取りを聞いて、「このような文化も我々日本にはない点だな」と思ったものです。

実は、当社の副社長や生産部長は外国人なのですが、彼らが田川工場の工場長にKさんという社員を任命したいと言ったことがありました。「彼は上手に英語を話せませんよ。それなのになぜですか」と尋ねると、「彼は意見を持っているから」との返答でした。彼は数多くの知識をもとに“I don't think so …”などと自分

の意見をはっきり述べるそうです。「笑顔だけの社交上手ではなく、やはり彼のようにしっかりと意見を持って言える人が求められるのだ」と実感し、Kさんが工場長になったときは私もとても嬉しくなりました。

■ 自ら“仕掛けて、仕込んで、仕組む”

私が最も憤慨するのは、国に危機感がないことです。こんなことを言うと“一億総評論家”の1人になってしまいますが、約2年前、私が参加している、ある日米会議の場で文部科学省の職員が日本のTOEIC L&RやTOEFLのスコアの低さについて説明されたことがありました。加えて、「日本は本来、書いたり読んだりするのは強いのに、その力も落ちている」と述べられたのです。私はすぐさま手を上げて、「誰の責任だと思っておっしゃっているのですか。そういう教育を10年間やってきて全く上手くなっていないということに、どう責任を感じておられるのですか」と申し上げました。

ようやく今、大学入試に4技能評価が導入されるなどの動きが始まりましたが、結局のところ、なかなか上手くはっていないようです。しかし、ただ「国が悪い」と言っても事は進みません。ここは、我々自身がいかに仕掛け、仕組み、実現させるかということがとても大事だと思います。「政府の腰が重たいのは自分たちのアピールが足りないのだ」という認識で、ぜひ自分たちの責任として取り組んでいてもらいたいと思います。

世界を見回しても、日本ほど平和で、安全で、食べ物も美味しい国はありません。ただ、国の競争力がじりじりと下がり、世界におけるポジションが下がっている中で、「まずいぞ」と言う人が少ない。今回の新型コロナウイルス感染症により、状況はさらに厳しくなるでしょう。しかしながら、それでも諸外国の日本に対する憧れや期待は高く、旅行先としても非常に多くの魅力を持っています。さらに、伸びゆくアジアにも近いわけですから、ぜひコミュニケーションスキルのベースとなる英語力や発信力を楽しく身につける支援を皆様方をお願いしたいと思います。そのためには、できない理由を並べるの

ではなく、“仕掛けて、仕込んで、仕組む”。動いてくれない人に対してどうしたらその人がこちらを向くか、それをいろいろと考えていただきたいのです。英語をもっと熱心にやろうよ、という流れに抵抗する人はいないはずですから、相手のせいにせず、その人を動かさないのは自分たちの仕掛けや仕込みが弱いからだ、自分ごととして取り組んでいていただきたいと思います。

「九州から日本を動かしていく」というのが、私がお会長の務める九州経済連合会のミッションです。私もビジネスの立場から、自分たちがなんとかしていく、そういった自発的な仕掛けでこのジリ貧の状態を変えていきたいと考えています。また、「地元飯塚を住みたくない街にしたい」という私のライフワークについても、仕掛けを考えています。そこで重要なのが、「飯塚は、医療と教育は福岡よりもいいよね」というような、“とんがりを持つ”ことです。おねだりばかりではなく、自分たちがどのように貢献していくか。このように英語に興味を持ち、熱心に関わっていらっしゃる方々が多く集まっているわけですから、ぜひ一緒になって仕掛け、仕組んでいていただけることを大いに期待しています。

質疑応答

Q 専門学校の職員です。当校には、昨年海外留学に行きたくても行けなかった学生がたくさんおり、彼らが4月からまた学校に戻ってきます。ところが、中には英語を学ぶことに対するモチベーションが下がってしまった学生がいるのですが、麻生様でしたら彼らにどのようなメッセージをくださいますか。

A その学生本人の熱量自体は、昔は75°Cだったけれども今は45°Cというように下がっているかもしれませんが。それでもかつて75°Cあったということはやはり、仕掛けが大事だということです。それ一つで、モチベーションは上げられます。

相手次第ではありますが、「一度きりの人生、22歳でも25歳であっても、自分は“とんがり”となる武器を持たなきゃいけない。その武器の一つとして、他の人に比べて自分は英語に興味があり、強みにしたいと思うなら、それをやはり磨かなきゃいけない」ということを“Don't forget!”と教えていくことです。そして、そのためのきっかけや出会いを作ってあげてください。例えば、英語の先生を活用して、「あなたできるじゃない。ぜひこれからも英語使っていこうよ」と声を掛ける。10°C、20°Cの人と違い、一度75°Cまで高まった人なら、火は付けやすいはず。新型コロナウイルス感染症のせいにされては学生もたまりませんし、かわいそうです。おそらくあと半年もすればまた外国人も戻ってくるでしょうから、ぜひ先生が工夫して仕掛けてあげてください。

Q 大学の教員です。本校の学生を見ても危機感がなく、非常にこの平和な日本に溺れているという感じがします。それでも、英語をやりたいという学生は多いです。そこで、英語を学びながら人間としての発信力、お話にあった工場長のような力を身につけていくためのモチベーションになるきっかけを学生に対してどのように与えていったらよいか、アドバイスがありましたら教えてください。

A 昭和20～30年代ではなくこの令和3年の日本にしているということ、そして同じ令和3年でも中近東やアフリカではなく日本にいるというこの恵みに感謝して、自分は神様からもらった一度の人生をどう過ごすかという考えが根付いていることと思います。ですから、その上で「自分はどうするのか?」「何をやるのか?」といった生涯の目標を与えてあげることが大事だと思います。

もう一つ、私が大学の先生方をお願いしたいのは、今後も、輝き、学び、魅力がある、そういう先生であり続けてほしいということです。私は、生涯学習、生涯現役、生涯収入の3つを自身に課していますが、先生方にも定年後もぜひライフワークとして学び続けていただきたい。きっと何か学生たちに影響を与えることができると思います。貴学の学生であれば、その火も付けやすいのではないのでしょうか。教員はやりがいのある仕事ですから、ぜひそういった魅力を持たれて発信し続けていただきたいと思います。

Q 当社は社員全員が TOEIC L&R 800点を目指していますが、中には勉強してもスコアが伸びず、高いモチベーションを保てない人がいます。そのような人に、英語を嫌いにならずにモチベーションを高く保ってもらうためにはどうしたらよいのでしょうか。

A 難しい問題ですね。こうすればよいという明確な答えは思いつきませんが、その方にやる気があって、それでもスコアが伸びないのであれば、やはり上司の方が少しチャンスを与えたり、外国人との出会いの場を設けたりして、エンカレッジすることが大事ではないでしょうか。とにかく褒めて、その人のよいところやモチベーションを引き上げていってください。30歳の方だったら、「90歳まであと60年もあるよ。まだ人生3分の1じゃない」と。「1日に換算するとまだ朝8時だよ。これから16時間どうするの」と。「このまま英語なしで過ごすの?まだ3分の2もあるんだから今から頑張ろうよ」というように、なんとか“よいしょ”してあげることが大切だと思います。

LINE Fukuokaの “WOW=No.1”をめざす語学支援とは

LINE Fukuoka株式会社 開発センター 開発2室 室長 **新田 洋平** 氏



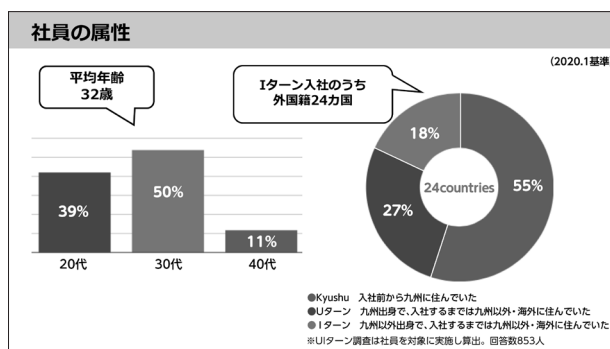
■ 国際色豊かな社員構成

当社は、2020年11月に設立7周年を迎えた比較的若い企業です。社員数は現在1,000人規模となっており、モバイルメッセージアプリケーションサービスを提供するLINE株式会社の国内第2拠点として「LINE」および関連サービスのあらゆる業務を担っています。

LINEグループは東京の本社に加え、全国5カ所に拠点があります。福岡には当社と、LINEの西日本地区の営業拠点である福岡オフィスが同じ場所にあります。さらに、東アジアを中心に米国やコロンビア、UAEなどにも拠点があります。こうした世界各地に存在する拠点と連携を取りながら「WOW=No.1」という目的のもと、新しいサービスを生み出すべく挑戦を続けています。

当社社員の属性は、資料1の棒グラフが平均年齢、円グラフが出身地域です。30代が半数を占めます。特徴的なのは、外国籍の社員が非常に多いことです。全社員のうち、海外から福岡に移住してきている社員は11%と比較的高く、24カ国から集まっています。

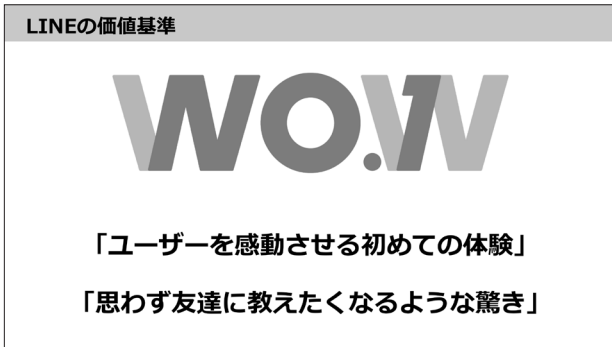
(資料1)



当社独自の取り組みに、福岡市との包括連携協定事業があります。現在、約175万人に利用いただいている福岡市LINE公式アカウントで培った技術を「LINE SMARTCITY GovTechプログラム」として無償提供しています。これにより、全国にある他自治体の開発費の負担を大幅に抑えることができると考えています。

LINEグループでは、価値基準を「WOW=No.1」と定めています。「WOW」という文字の中に「No.1」が入っています(資料2)。この「WOW」は、ユーザーを感動させる初めての体験や、思わず友人などに教えたいような驚きのことを指します。WOWを目指すからNo.1になれる、No.1を目指すからWOWを提供できる。この2つは表裏一体であると考え、社員間で価値観を共有しています。もちろん、語学研修もこの「WOW=No.1」に従い、ユーザーを研修受講社員に置き換え、彼らにとって感動する体験となるよう、日々取り組んでいます。

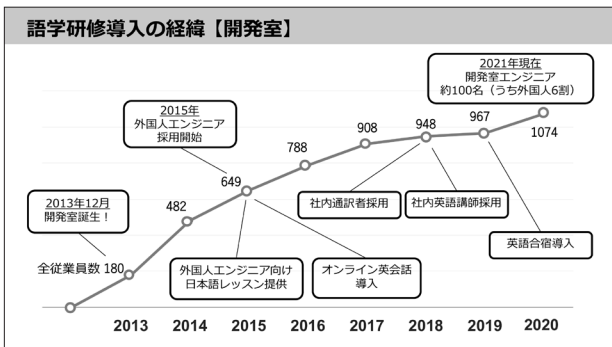
(資料2)



■ 外国人技術者採用を機に語学研修導入

英語研修について説明する前に、まず私が所属する開発室の変遷について紹介します(資料3)。折れ線グラフは開発室を含む当社の全社員数です。開発室は2013年12月に発足し、私が入社した2014年当時は、海外から来ているエンジニアは1人もいませんでした。

(資料3)



2015年に転機が訪れます。エンジニア採用の強化を目的に、採用試験応募における使用言語の要件を、日本語のみから日本語か英語かのいずれかに緩和しました。これにより、国内だけでなく世界中を対象に採用活動を行えるようになりました。と同時に、すでに海外から来ている数人のエンジニアを対象に日本語レッスン、日本語話者の社員にはオンライン英会話の提供を開始しました。

このように、海外採用を開始したことが語学研修導入のきっかけとなっています。

さらに、2018年には開発組織専門の通訳者と社内英語講師も採用しました。2019年からは英語合宿を導入し、高度なコミュニケーション能力が求められるエンジニアの希望に沿うような内容で、1週間程度集中的に学ぶ機会を提供しています。そして2021年現在、開発室は約100人規模となり、そのうち約6割が外国籍の社員という非常に多様な組織構成になっています。

■ 英語使用シーンは社内がほとんど

開発室における英語を使う環境をまとめてみました(資料4)。海外からの応募者に対して採用面接担当者として英語を話す機会もありますが、基本的に英語を話す相手は同僚がほとんどです。

(資料4)

開発室での英語使用環境

Who with?
<ul style="list-style-type: none"> 同僚 (開発室エンジニア) 海外の面接応募者 (エンジニア職)
When?
<ul style="list-style-type: none"> Daily & Weekly ミーティング 日々のアップデート 面接 海外カンファレンス 仕様書
How?
<ul style="list-style-type: none"> 対面 Zoom (場合によって、社内通訳有) Slack プレゼン録画 Wiki (社内共有資料)

英語を話す場面は、日々のミーティングやプログラムの設計についてのディスカッション、現在の業務内容についてのレコーディングが中心です。また、最近はオンラインが中心となっていますが、海外のカンファレンスに参加し、セッションを聴いたり、登壇者として話したりもします。このほか、設計書の作成にも英語を使っています。

あるエンジニアの1日を例に、普段の業務の中でどのように英語を使っているかをご紹介します。当社では2020年2月から在宅勤務を導入しています。午前9時半から始業し、オンライン英会話に取り組む人や、午前10時半から約75分の英会話グループレッスンに参加

する人が多いようです。午後3時からのスタンプ事業開発チームの定例ミーティングは、東京と福岡の拠点をつないで実施しています。このチームは約8割が外国籍なので、ほとんどの会話を英語で行っています。このミーティングで通訳が入ることはほとんどないようです。

■ 語学研修の取り組み

開発室では、5つの研修を語学支援として提供しています(資料5)。基本的には費用は全て会社負担とし、原則就業時間内に希望した人のみが受講しています。受講を強制したりはせず、「やりたい人が好きなタイミングでやっていいよ」という方針です。

(資料5)

開発室での語学研修
1. 社内講師による英語研修
2. オンライン英会話
3. ネイティブ講師によるテクニカルライティング研修
4. 英語合宿
5. TOEIC L&R・各種英語テスト受験

↓

会社負担・就業時間内・希望者のみ (最低受講数規定有り)
--

このような研修プログラムとは別に、日本国内のLINEグループ全社員に向けて月1回、1時間ほどランチタイムの時間を活用して、著名な講師による英語学習をテーマにしたオンラインセミナーを開催しています。毎回約200人の社員がZoomで集まり、ランチを取りながらネイティブ講師の講話を聞いています。異文化コミュニケーションや英会話講座、英語学習法についてお話いただくなど、リラックスした雰囲気です。

また、社内で英語学習者向けのLINEグループSlackチャンネルも作っています。現在、約350人が参加しており、映画に関する話題や「こんなおもしろい記事を

見つけたよ」といったことをチャットで気軽に共有し合っています。

■ TOEIC® L&R IPテストをどう活用するか

これらの語学研修の中でTOEIC® Listening & Reading Test(以下、TOEIC L&R)の団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下 IPテスト)をどのように活用しているかについて説明します(資料6)。

(資料6)

TOEIC® L&R IPテストの目的
◆ エンジニアの英語学習成果を測るため
◆ 英語研修のプレースメントテストとして
◆ 語学支援の一環として

目的は3つあります。1つは、エンジニアの英語学習の成果を測るためです。マークシート方式のテストを導入していた頃は、TOEIC L&R IPテストは半年に1回実施していたのですが、2020年からはオンライン方式に切り替え、実施回数も年2~4回に増やしました。原則、開発室の全社員は年1回必ず受験し、さらに好きなタイミングでもう1回受けてもらいます。語学研修に参加している社員は年2回必ず受けます。2つ目は英語研修のプレースメントテストとして、3つ目が語学支援の一環としてです。エンジニアの部署以外の希望者も、希望すればTOEIC L&R IPテストを受験することが可能となっています。

英語研修はスコアに応じて様々なものがあります(資料7)。2020年2月から全てのレッスンをオンライン中心にしています。私も参加しているテクニカルライティングクラスでは、福岡に住むフリーランスのイギリス人工

エンジニアを講師に招き、自分が仕事で書いたドキュメントをレビューしてもらったり、ネイティブならではの表現方法や、エンジニアとして正しい文章の書き方を教わったりしています。

(資料7)

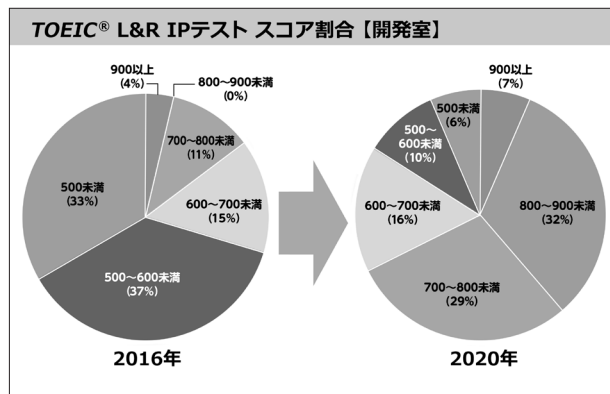
TOEIC® L&R IPテストによるクラス分け				
TOEIC L&Rスコア 600未満		600以上	730以上	860以上
TOEIC BASIC クラス (週1回2時間)	テクニカルライティングクラス (週1回1時間)			
	英語合宿 (計7日、約20時間、対象者のみ)			
文法/読解クラス (隔週1時間)	TOEIC730 クラス (週1回2時間)	プライベートレッスン (週1回40分)		
		英会話グループレッスン (週1回75分)		
オンライン英会話 (受講率35%以上が条件)				

英語合宿は、海外からの採用応募面接業務などといった英語の必要性が高い社員が主な対象で、高度な英語コミュニケーション能力の習得が目的です。

■ スコアの推移から見る英語力の向上

開発室社員の TOEIC L&R の平均スコアは、少しずつですが毎年上昇しています。2016年の545.2点から2020年は730.3点と、4年間で約185点上がりました。これは、あくまで任意で受験した人の平均ですので、普段英語研修に参加していない人のスコアも含まれています。また、860点以上の高得点を取れる人でも、受験していなければこの平均値には含まれません。スコアの内訳を2016年と2020年で比較すると、2016年は600点未満が約7割を占めていましたが、2020年には700点以上が約6割を超えました(資料8)。

(資料8)



TOEIC L&R IPテストのオンライン方式への移行により、一定の期間中であればいつでもどこで受けてもよいというように、時間の融通がきくようになったほか、約1時間で済む、受験後すぐに結果が分かるといった点がエンジニアから好評で、満足度も高いです。現在の状況が落ち着いた後も、当社では引き続きオンライン方式で TOEIC L&R IPテストを実施していきたいと考えています。

■ スコアアップの秘訣は必要性

当社では、TOEIC L&Rスコア自体が査定(昇給・昇進・ボーナス)の対象になることはありません。“No Carrot or Stick”で、飴も鞭もありません。英語スキルを業務に上手く活用することで良い結果が出て、人事考課での評価につながるという間接的なメリットはよくありますが、TOEIC L&Rスコアそのものが何かにつながることはありません。

英語スキル向上の実例として、当社の2人を紹介します。1人目はエンジニアのHさんです。彼の2016年の TOEIC L&Rスコアは385点だったのですが、徐々にスコアを伸ばし、2020年には825点と4年間でスコアが倍以上になりました。これは驚くべき成果だと思います。彼は外国籍の社員が多いチームに所属しています。学生時代から英語が苦手だったそうで、入社当初はこれほどまでに英語を使う環境になるとは思っておらず、相当心配したそうです。ですが現在は、同僚とのコミュニケー

ションを非常に楽しんでいますが、海外からの応募者との面接をすることもできます。また、エンジニアのスキルアップとして、海外の技術記事などを自ら読めるようになり、世界が広がったというポジティブな意見ももらっています。これは、必要性があるとスコアにもつながるという例ではないでしょうか。

もう1つの例は、当社COOの鈴木優輔です。noteというブログに、520点からスタートして900点を越えた経緯を自身の言葉で記事にしています。

私がこのブログを読んで見習いたいと思ったのは、彼がアウトプットの場を定期的に設けている点です。もちろん、500点台から900点台に一気に上がったわけではありません。100点上がるたびに、業務などに英語を使う場面をしっかりと用意して、例えばある程度スコアが取れるようになったときはスタンフォード大学MBA生に英語でプレゼンテーションをしました。このように、しっかりアウトプットしてチャレンジしているところに大変感銘を受けました。私だけではなく、多くの社員がこの記事を読んで驚いたことと思います。ブログを読んだ人が他の人にも教え、読んで感動した人が自分も頑張ろうと思う、そうした人と人とのつながりで好循環を生み出していき、そうやって英語を楽しんでいく1つの例だと思っています。

■ LINEの価値基準にも通ずる 語学支援の理念

最後にLINE Fukuokaの「WOW=No.1」を目指す語学支援についてですが、語学学習というものは、1人だとくじけやすいものではないでしょうか。私たちは、そのような孤独に陥りがちな語学学習においても、人とのつながりを大事にしたいと考えています。そして、LINEグループの「WOW=No.1」という価値基準に則り驚きや感動を提供することで、研修を受ける社員全員が思わず他の人たちにもその感動を伝えたいくなる、そんな語学支援を目指して取り組んでいます。

質疑応答

Q TOEIC L&Rスコアが昇級条件や昇進条件になっている環境では、それがプラスのモチベーションとなってスコアも伸びるのではと感じます。貴社では特に昇進の条件に加えているわけではないのに、4年間で約185点も平均スコアが伸びたのは何が要因だったのでしょうか。

A 個人的な意見ですが、語学を伸ばすときに重要なのは「必要」か「楽しい」かのどちらかではないでしょうか。当社に関しては、海外から来たエンジニアは英語が、私たちは日本語が話せるという状況からスタートしました。彼らは日本語をたくさん勉強して歩み寄ってくれるので、私たちも英語を勉強して歩み寄っていく「必要」がありました。とにかくコミュニケーションを取らないと良いサービスが作れない、という環境を作ったというのが1つあると思います。

もう1つの「楽しさ」ですが、当社では自身の経験をブログに書いたり、「おもしろいアプリがあるよ」「こういったサービスで英語を勉強できた」「こんな動画がおもしろかった」などといった話で皆で楽しく盛り上げられる環境を作っています。そういった必要性和楽しさをいつか両立できればと考えているところですので、インセンティブをつけたり、スコアそのものを目的にしたりすることは今のところは考えていません。

Q 外国籍エンジニアの受け入れに伴う既存の社員の反応、不安の払拭方法について教えていただけますか。2015年に2言語対応したことで発生した課題と解決策についても伺いたいです。

A このように取り組んだのが正解だったということではなく、改善の毎日です。受け入れ当初の2015年は、開発室全社員の顔と名前が一致するほどの人数しかいない小さな組織だったことが幸いし、組織内でまずやってみようという雰囲気をすぐに作れたと思っています。また、優秀なエンジニアと働くことが仕事のモチベーションになっているというエンジニアは非常に多いです。ですから、海外から人を迎え入れることに対して、自身のより良い成長につながると期待していた社員が多かったと思います。

外国籍の社員は開発室では6割以上、もう少しで7割になりますが、全社員で見るとまだ約11%です。そのことで生まれる課題については、そうした組織間のギャップをどうやって埋めていくか日々考えています。通訳者を多めに入れるといった工夫や、異文化ギャップのようなものが発生しないよう、コミュニケーションの機会を多く作るようトライしています。

製造業において求められる 英語力と仕事現場での 英語使用の実際

株式会社ホンダロック 人事・総務部 人事・労務課



池田 典子 氏

坂本 悠 氏

■ ホンダロックの事業展開

株式会社ホンダロックからは、製造業の現場で求められる英語力と、実際にどのように、どの程度英語が使用されているのかをご紹介します。

まず会社概要についてです。当社の事業概要としては、主に自動車やバイクなどの部品製造と販売を行っています。宮崎県に本社があり、創業から今年で59年となり、来年で還暦を迎えます。本田技研工業株式会社が親会社で、ホンダグループの一員という位置付けになります。製造業ということもあり男女比は8:2と男性が多く、社員は1,000人ほどいます。

当社が製造している具体的な製品には、大きく分けて3つの柱があります。セキュリティ系、エントリー系、視界・センサー系です(資料1)。

セキュリティ系には、エンジンのスタートストップスイッチなど、鍵を中心とした製品が含まれます。エントリー系には、自動車のアウトサイドドアハンドルなどのハンドル関係の製品があります。視界・センサー系では、当社全体の主力製品の1つともいえるドアミラーが挙げられます。

(資料1)



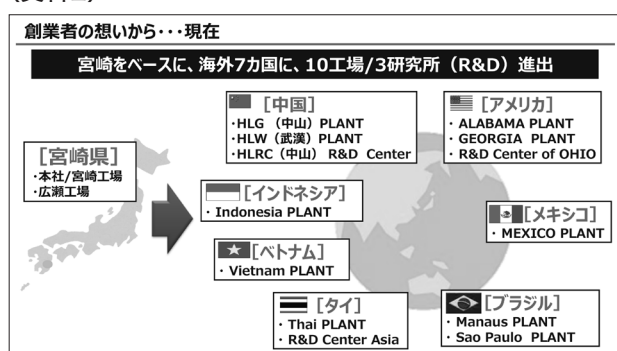
そのほか、バイク関連の製品も作っています。自動車はほとんどスマートキーになっていますが、バイクでも徐々にスマートキー化が進んでいるといった状況です。本田技研工業と共同開発して、スマートキーを持っていれば、つまみを回すだけでエンジンがかかるようなキーシステムも展開しています。社名に「ロック」とあるように、当社は鍵の製品開発が原点となっています。

また、現在は一般消費者向け製品の開発と販売も行っています。住宅用関連と自転車関連の2つがあります。例えば、住宅用では簡単に玄関の鍵の施錠、開錠ができるキーレスシステム、自転車関連では先ほどバイク製品として説明したのと同じ仕組みのスマート開錠システムが挙げられます。自動車の鍵を作るところから始まり、そこで培った技術を生かして製品展開を進め、B to C事業も強化しているところです。

■ 宮崎を基盤に世界へ打って出る

なぜ当社が宮崎県からスタートしたのかというと、創業者・本田宗一郎の「宮崎に近代工業を興すことで、今後宮崎全体で機械工業が栄えることを望む」という強い想いがありました。世界に通用するキーロックメーカーを目指し、現在は、海外7カ国、延べ13の拠点を構えています(資料2)。

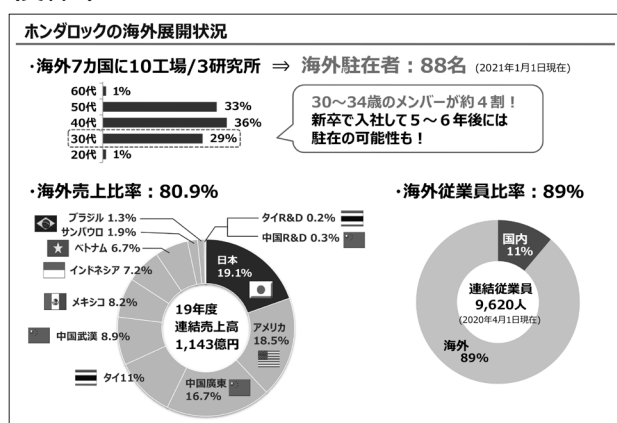
(資料2)



■ 新卒でも5～6年後には駐在の可能性も

資料3は、当社の海外展開状況です。現在は会社全体の売上比率の約8割、従業員比率の約9割を海外が占めています。

(資料3)



これらの国々に対し、当社の社員は出張や駐在というかたちで関わっています。2021年1月1日時点で、88人が海外に駐在しており、その内訳はおおむね30代から50代が中心です。若い方ですと、30代の前半から海外駐在員に抜擢されるケースもあります。

出張と駐在は異なり、駐在員は現地に3年から5年いることとなります。海外駐在に行く目的は、海外拠点の管理・監督、そして現地社員の教育です。現地社員に専門知識を身につけてもらうため、日本の社員が海外に行って、スキルを伝承しています。

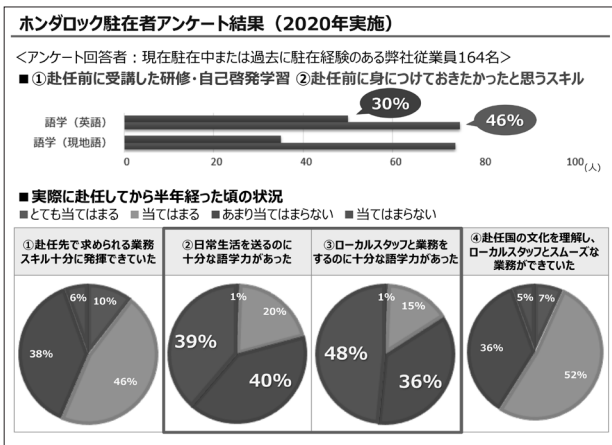
■ 海外赴任先で求められる英語力

駐在員は、現地社員の比率が9割という、周りに日本人がいない状態で仕事することになります。そのため、現地社員とのコミュニケーションが必須となり、語学力が求められます。

駐在中または過去に駐在経験のある社員が、語学に対してどのように感じているのかを調べてみました。

その結果が資料4になります。棒グラフが示しているのは、駐在員が赴任前に受講した研修・自己啓発学習と、赴任後に感じた「赴任前に身につけておきたかった」と思うスキルです。前もって英語を学習した人は164人のうち約30%でしたが、それ以上の約半数の46%の人が駐在後に「やっぱり英語を勉強しておけばよかった」と思っていたことが分かりました。やはり、現地に行ってあらためて語学の重要性を痛感するようです。

(資料4)

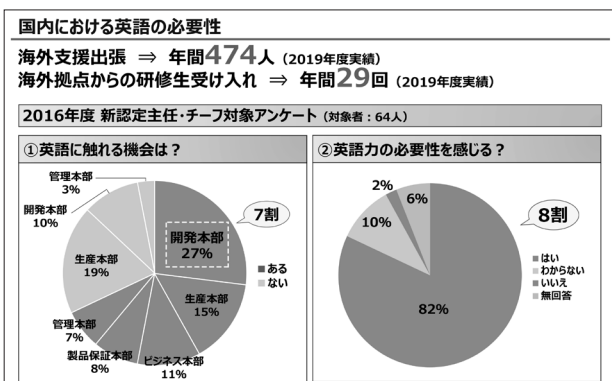


円グラフは、赴任して半年経ったころの状況を聞いたものです。真ん中の2つの円グラフが語学に関する項目です。日常生活ならびに業務において「十分な語学力があった」との回答は20%にとどまりました。大半の駐在員が、言葉の面でかなり苦労していたことが伺えます。

■ 国内にいても英語は必要

次に、国内社員の英語の必要性について説明します(資料5)。当社では、日本から海外支援出張をする機会があります。支援出張とは例えば、新しい自動車のモデルが海外で立ち上がる際の技術サポートやスキルの伝承をするためのものです。2019年度の実績になりますが、年間延べ474人が支援出張に行きました。

(資料5)



また、海外拠点から研修生として現地社員を受け入れる機会もあります。こちらは同じく2019年度の実績で、年間29回ありました。

数年前、20代から30代のリーダークラスを対象に、国内社員が英語についてどう感じているかを聞いたアンケート結果が2つの円グラフです。約7割が「業務で英語に触れる機会がある」、約8割が「英語力の必要性を感じる」と答えました。

■ 開発現場の英語使用場面とは

それでは、特に英語に触れる機会の多い開発本部を例に、英語を使う業務を見ていきたいと思います(資料6)。当社の開発部門は、海外の自動車メーカーへのビジネス拡大を目的として業務を行っています。例えば、コンサルタント会社とのやり取りや、技術をPRするためのプレゼンテーション資料の準備、実際に現地へ出向いてプレゼンテーションをする機会もあります。海外メーカーが求める製品を作る際には海外規格に準ずる必要もあるので、英語で書かれた規格の内容を読み込んで開発しなければなりません。さらに、先ほどご紹介したように海外に複数の開発拠点がありますので、現地社員が来日して一緒に仕事をすることもあります。このように、国内にいても英語の必要性を感じる場面は多くあります。

(資料6)



■ 家族も一緒に語学研修

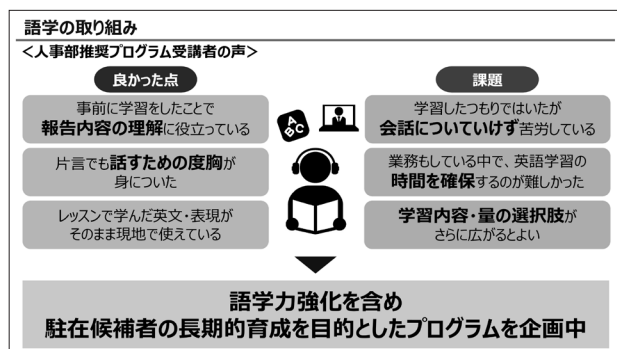
語学の必要性に直面する社員が多い中、会社としていくつかの支援を実施しています。まず、駐在員のための語学補習サポートです。これは赴任前の駐在予定者と、帯同する予定の家族を対象としています。例えば、学習教材の購入費や英会話スクール費等を語学習得費用としてサポートします。

また、ここ数年は、赴任前の限られた期間でより効果的に語学習得に取り組んでいただくため、人事部門より英語と中国語の外部研修プログラムを提案しています。同プログラムは、基本的な文法や語彙などのインプットからスピーキングといったアウトプットまで網羅されています。さらに、学習アドバイザーによる定期的なサポートや講師とのミーティングなども設定されており、非常に効果的なプログラムとなっています。

■ 長期育成プログラム充実化へ

では、この英語プログラムを受講した現駐在員の声をいくつかご紹介したいと思います(資料7)。まず良かった点として、「現地で報告を受ける際の内容理解に役立っている」「話すための度胸が身についた」といった声がありました。

(資料7)



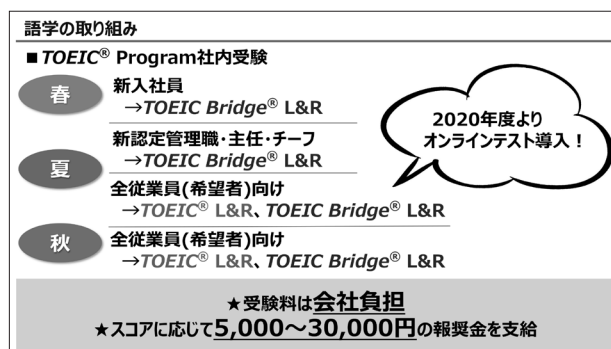
一方、課題としては、「学習したつもりではいたが、会話についていけない」「業務をしている中で英語

学習の時間を確保するのが難しかった」という声がありました。当社では赴任の内示が下りるのが3カ月ほど前という事情もあるため、引っ越しや業務の引き継ぎなどがある中で英語学習もするというのはなかなか大変なことです。いくら効果的なプログラムであっても、学習期間があまりにも短かったり、本人が忙しすぎて時間が確保できないと、本末転倒になってしまいます。

このような課題を踏まえ、現在、語学力強化を含めた駐在候補者の長期的な育成を目的としたプログラムを企画中です。2021年度スタート予定となっています。

続いて、資料8は日本国内の社員向けに実施している取り組みです。年間を通してTOEIC® Programの社内受験を実施しています。まず、社員の英語力チェックを目的とし、研修の一環として、各階層にTOEIC Bridge® Listening & Reading Tests (以下、TOEIC Bridge L&R)の団体特別受験制度(IP:Institutional Program、以下IPテスト)を導入しています。さらに、希望者に対してはTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC L&R)とTOEIC Bridge L&RのIPテストをそれぞれ年2回実施しています。

(資料8)



受験料は基本的に会社負担で、スコアに応じて年1回、報奨金を支給しています。また、2020年度からオンラインによるテストも導入し、さらに気軽に受験できる機会を提供しています。

このように、駐在予定者と国内社員それぞれに語学習得のための取り組みを実施してはいますが、最良な育成やサポートにたどり着いているわけではなく、英語

や外国語に苦手意識があり苦勞する社員が多いのが現状です。

今後、グローバルで活躍できる人財を増やすためにも、育成機会の拡充やより手厚いサポートの提供、仕組みづくりを進めていきたいと思っています。

質疑応答

Q 当社は職場で実際に英語を使う機会が少なく、社員の学習モチベーションを持続させることに苦勞しています。そのような状況で、学習モチベーションを持続させる良い方法があればお聞かせください。

A なかなか英語を使う機会がなければ、やはり、そういった機会を会社側が作ることが大事ではないでしょうか。機会がないと、本人のモチベーションはなかなか上がらないと思いますので、彼らが英語の楽しさを実感できるようなプログラムを考え、提供することが大事だと思います。

Q オンライン方式によるTOEIC Programを導入されたとお伺いしましたが、導入に至った経緯を教えてください。また、マークシート方式からオンライン方式にしたことによるメリットやデメリットを教えてください。

A オンライン方式のテストを導入した一番のきっかけは、「手軽さ」です。従来のマークシート方式による試験は、例えば定時後に集合して受験してもらうという、かなり限られた時間の中で実施する必要性がありました。オンライン方式の導入後は、集合して受験するか、各々の好きな時間や場所で受験するかを選べるようになったため、受験者にとってもかなり受けやすさを感じられているのではないかと思います。

ただ、昇格試験などのスコアとして使いたいときには、公正性を担保するため、オンライン方式でも監督者を用意した上で集合受験をする必要があると思います。

English Education Strategy of FFG



株式会社ふくおかフィナンシャルグループ 人事統括部 人財開発センター長

酒口 昇 氏

■ JCIF出向・海外駐在を経て

本日は、私どもふくおかフィナンシャルグループの英語に関する行内教育の戦略や状況についてご紹介させていただきます。人事統括部人財開発センター長の酒口昇と申します。よろしくお願いいたします。

人財開発センターは、当行の行員約1万1,000人の行員教育を中心に行っているところです。「人財」という漢字についてですが、先代トップの「人は宝だ、社員は財産だ」という強い思いがありまして、この漢字をあてています。

まず私自身についてお話しします。私の大学卒業時のTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC L&R)のスコアは、なんと395点でした。リスニング問題がいつ始まったかもよく分からず、あっという間に終わってしまったのを覚えています。

1992年に福岡銀行に入行後、国内の営業店や東京支店に配属されましたが、28歳の時に「英語を勉強し直そうかな」とふと思立ちました。そのきっかけは2つあります。1つは、英語でいろいろな方とコミュニケーションを図れたらカッコいいなと単純に思ったこと。もう1つは、英語を学んでいたら将来何かいいことがあるかもと漠然と思ったことです。英語を勉強し直し、約2年でスコアは750点前後まで伸びました。

銀行や金融機関では、若手教育の一環として、視野を広げさせる、あるいは人的なネットワークを広げさせるためにあえて行外に出向させることがあります。私も31歳

で公益財団法人国際金融情報センター(JCIF)へ2年間出向しましたが、これが初めての海外への出張、滞在経験でした。JCIFは新興国のマクロ経済を調査するシンクタンクですが、配属先が中東アフリカ部だったことから、南アフリカのヨハネスブルグを中心に出張をしました。右も左も分からず、治安に不安を覚えることも多かったです。

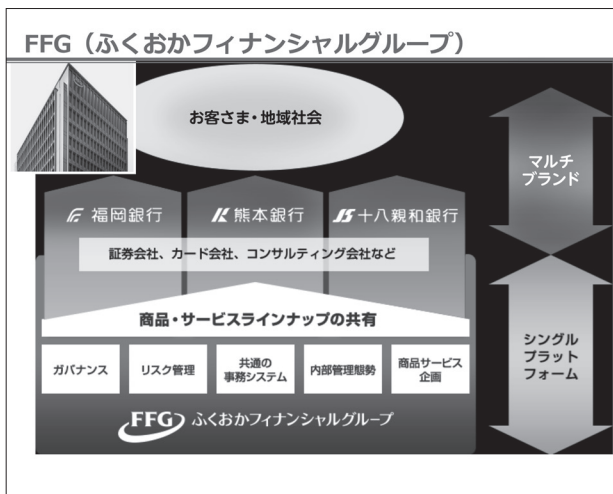
その後一旦日本へ戻り、2011年にはシンガポールへオフィス開設員として赴任しました。ご存知の通り、シンガポールは多民族国家です。バイリンガル、トリリンガルが当たり前という環境にも衝撃を受けました。当時は家族で駐在しました。日本へ戻ってきてからは、引き続き海外関連の仕事をしており、2年前に人事部に異動、現在は人財育成の立場にあります。

TOEIC L&Rは10年ほど前から定期的に家族皆で受けています。シンガポールに駐在していた時に現地で知り合った友人たちとは今でも交流が続いており、来日時には我が家にも泊まりに来てくれる仲です。また、週2、3日、朝の30分間、フィリピンの英会話学校のオンラインレッスンも続けています。

■ 金融ニーズに対応するワンストップ体制

当行は、福岡銀行と熊本銀行、長崎に本店を置く十八親和銀行を中心とした広域展開型地域金融グループです(資料1)。福岡銀行を中核として、様々な商品やサービスをお客様にご提供しています。加えて、全ての銀行サービスがスマートフォン1つで完結する、日本初となる新しいデジタルバンク「みんなの銀行」を立ち上げ、今年5月からミレニアル世代やZ世代を中心に展開していく予定です。

(資料1)



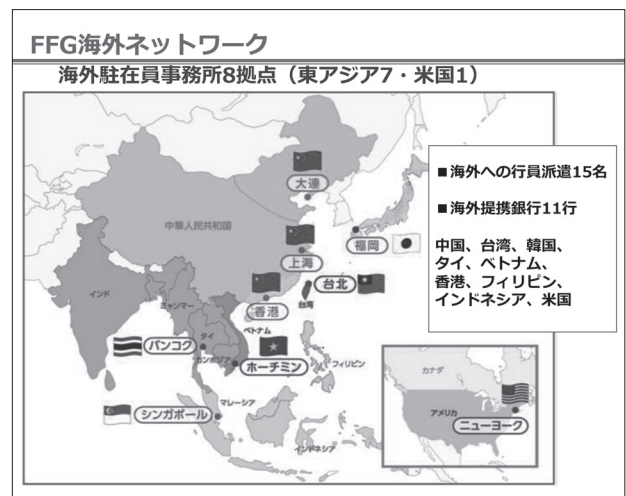
お客様のニーズ、ご希望、課題解決のご要望はたくさんあり、内容も多様で複雑化してきています。こうした中で、法人のお客様や個人のお客様を様々な視点からサポートするとともに、私どもの銀行では解決できない部分については関連会社などと連携し、それぞれの強みを生かしてワンストップでお客様をサポートしています。

■ 東アジア中心に8拠点で海外事業を支援

海外のネットワークは、東アジアを中心に8拠点あります(資料2)。各拠点の担当エリアは色分けの通りです。行員は出張を重ねながら、担当エリアに進出、

もしくは貿易(輸出入)を希望するお客様のサポートをしています。先ほどホンダロック様の講演がありましたが、私もシンガポール時代にはジャカルタ出張で現地のホンダロック様を度々お伺いし、勉強させていただきました。現在の海外への行員派遣数は10数人です。グローバル企業といえるほどではなく、必要最低限の人数を派遣しています。

(資料2)

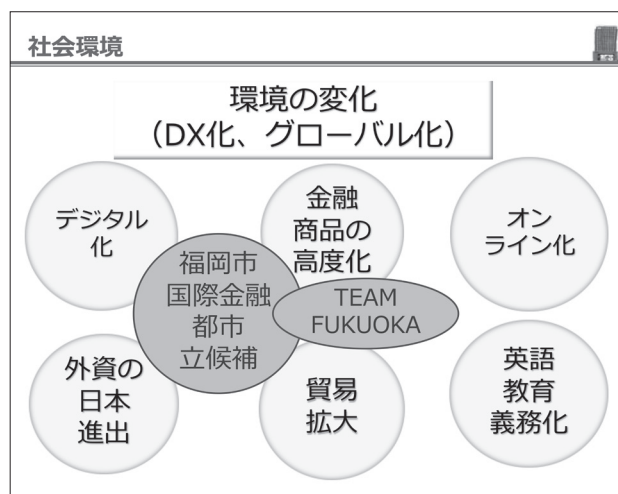


法人のお客様を対象とした海外におけるビジネスサポートの内容は、大きく分けて4つあります。まず「貿易(輸出入)」です。新型コロナウイルス感染症の影響もあり、個人のお客様のオンラインショッピングが一層盛んになっていますが、自社の商品を売りたい、輸出したいというご要望に対応します。2つ目の「金融商品」は、輸出入の決済時のリスクをできるだけ軽減するため既存の金融商品・サービスを組み合わせながら、お客様の財務的な課題解決のお手伝いをしています。その他に「海外進出」と、今のところ新型コロナウイルス感染症の影響により中断していますが「インバウンド」が挙げられます。

■ FFGを取り巻くデジタルトランスフォーメーション(DX)化と国際化の波

ご存知の通り、昨今のデジタル化、あるいはグローバル化、貿易拡大、英語教育の義務化といった環境の変化、進展は目覚ましいものがあります(資料3)。特に、福岡市は今、国際金融都市構想に立候補しています。なんとかこれを実現させて、アジアに一番近いという地の利を生かして、その地位を確固たるものにするべく官民を挙げて「TEAM FUKUOKA」で取り組んでいます。先ほど基調講演いただいた麻生様のご尽力も多々ございまして、皆で地元福岡を盛り上げていこうとしています。

(資料3)



■ 行内で英語が必要とされる場面とは

先日、香港の大きな資産運用会社が福岡に初進出し、4月から営業を開始するといった明るいニュースがありました。海外金融機関の国内展開が進んでいます。そうした中で、私どもの銀行内で英語が必要とされる、または英語ができれば望ましい業務をご紹介します(資料4)。

(資料4)

行内環境
<p>当行内で英語が必要とされる (または望ましい) 業務</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ お客様の海外展開・インバウンドサポート ➢ 海外の投資家向けIR ➢ デジタルビジネス情報収集 ➢ 海外企業スタートアップサポート ➢ マーケット関連情報取得 ➢ 海外銀行との連絡 ➢ 英文融資契約書 ➢ マネーロンダリング対応 ➢ 他・・・

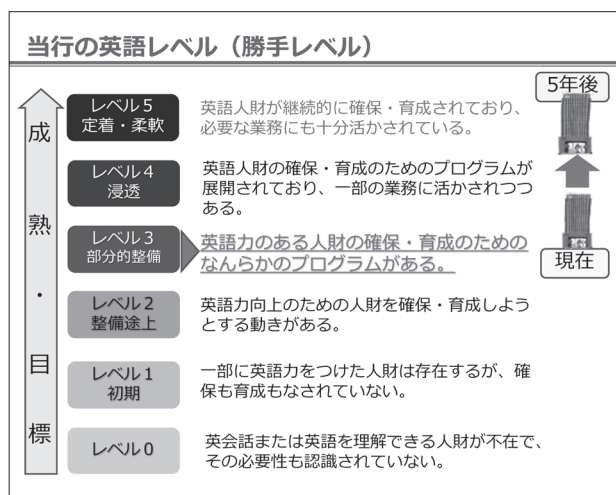
1つ目に、海外の投資家向けの IR活動というものがあります。ふくおかフィナンシャルグループの発行済株式のうち、約30%を外国人や海外法人が保有しています。国内の株主の方々はもちろん、外国の方々への支えもあって会社が成り立っていると言っても過言ではありません。ですから、そういった海外の方々に向けた、英語による正確で丁寧な情報発信が必要になってきます。

他にも、デジタルビジネスの情報収集、海外企業のスタートアップサポートなど様々な場面で英語が必要、もしくは英語力があるとより業務がスムーズにいくと考えています。つまり、英語力があれば、より正確に、豊富に、そしてより早く情報収集やご提案が可能になるということです。

■ 行内の英語レベルの現状と目標

資料5をご覧ください。一番下にある「レベル0」というのは、英会話または英語を理解できる人財が不在でその必要性も認識されていない状況を指します。「レベル5」は、英語人財が継続的に確保・育成されており必要な業務にも十分に生かされている状況です。このようなレベル分けにおいて、当行の英語のレベルはというと、おおむねレベル3か4だと私は認識しています。5年後には、レベル5にする目標を描いています。

(資料5)



■ コロナ禍を機にオンラインレッスンに切り替え

現在実施している具体的な英語教育施策は、大きく2つあります(資料6)。

(資料6)

2020年度の英語教育実施施策と対象人数		対象者人数
米国人講師	オンライン・グループレッスン オンライン・テスト	100名
	海外赴任予定者向け 特別PVレッスン	数名
	行内eラーニング 動画配信	4,000名
インセンティブ他	TOEIC L&R IPテスト実施（数回/年）	25名/回
	外部オンライン英会話学校紹介	数名
	奨励金（TOEIC L&Rスコア700点以上）	30名/年

1つ目は、3年前から米国人を出国という形で雇用して行っている、行員向けの英語レッスンです。このレッスンの実施形態は、主にオンラインによるグループレッスンです。新型コロナウイルス感染症の影響により、対面からオンラインに切り替えました。仕事が終わって行員が帰宅した後の午後7時ごろから午後10時ごろまで実施しています。この他、海外赴任をする前に行う特別プライベートレッスンや、行内eラーニングを活用した動画配信も実施しています。

2つ目は、インセンティブです。当行では年に数回、TOEIC L&Rの団体特別受験制度(IP:Institutional Program、以下IPテスト)を実施しています。また、先ほど私自身も受講していると紹介しましたが、オンライン英会話学校があります。これは数ある中から料金が安価で使い勝手もよく、信頼できるところを紹介しています。この他、TOEIC L&R IPテストで700点以上のスコアまたは800点以上だと数万円の奨励金を支給しています。

現在は、これらの施策のうち、資料6の色付きの3つ

に注力して進めているところです。

当行員の現在のTOEIC L&Rスコアの高得点取得者の内訳はというと、去年の9月時点で800点以上が82人、700点台が104人、600点台が128人でした。約300人が600点以上という状況です。2年後には、700点以上が300人、600点台が250人という、果敢でチャレンジングな目標を設定しています。

■ 英語は夢を実現させるための手段

行内では、若手行員にあの部署に行きたい、こんな仕事がしたい、チャレンジがしたいというように手を挙げてもらう、公募によるチャレンジ制度を設けています。デジタル系や海外系など、部門・部署によっては英語力があるとなお良いことから、英会話力が選考の条件になっている場合もあります。自分のやりたいことや関心事を実現するためには、英語力はあって決して邪魔にはならないものです。むしろ、夢の実現のために英語力は必要だといえるのではないのでしょうか。

英語が上手く話せることは、手段あるいは道具であって、目的ではありません。その手段が多ければ多いほど、あるいは良い道具を持っていればいるほど、自分の夢を実現できる可能性は高くなりますし、チャンスも広がると思っています。

私はいつも「自分の土俵は自ら広げていこう」と話しています。特に若い人たちには、少し先を見つめて今から始めるということに取り組んでもらいたいです。小さな一歩かもしれませんが、やがて大きな実績につながることを期待して、英語に関心を持ってもらいたいと思っています。

昨今、例えばスポーツの国際大会で若い日本人選手の方々が表彰台に立ってヒーローインタビューを受けるときに、英語で流暢に答える場面を多く見かけるようになったと感じます。こうしたロールモデル的な方々の存在は、英語を上達したいというモチベーションにもつながると考えています。

厳しい時代ではありますが、ピンチはチャンスです。

チャンスがたくさんこれから広がっているということ、ぜひ若い人たちに伝えていきながら、当行でも引き続き英語教育を継続していきたいと思います。

質疑応答

Q 新入行員の英語力はいかがでしょうか。貴行を志望される学生の TOEIC L&R の平均スコアなどをお聞かせください。

A 新入行員は地元九州で貢献したいという者が多く、海外やグローバルという志向はそれほど高くありません。正確なデータはありませんが、福岡銀行だけで毎年約 200 人が入行し、そのうちスコアが 700 点以上ある者は 1 割弱くらいだと思います。目標達成に向けて、引き続き英語教育を継続していきたいです。

Q 銀行員の方は多岐にわたる資格取得に励まれているとお聞きます。その中で、英語のプライオリティは高まっているのでしょうか。

A 実は私も、近日中にある資格の更新試験がありますが、この歳になっても様々な資格の試験や更新があります。ご存知の通り、銀行は大変試験が多いです。しかしながら、最近の状況をみると、特に若い人たち、20～30 代前半の行員については、将来の自分のキャリアを考える上で英語に対する関心が間違いなく高まっていると思っています。先ほどご紹介したグループレッスンや教育施策に進んで参加する者が非常に増えてきています。そうした意味で、特に若い人の気持ちの中で、プライオリティは少しずつ高まってきていると考えています。

発行月：2021年 4月

発 行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町 2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521-5012

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦 2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町 3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<https://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of ETS, Princeton, New Jersey, USA, and used in Japan under license. Portions are copyrighted by ETS and used with permission.

IIBC 世界は、あなたでつながる。

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication